

金炭窯

— 市村氏家庭の娯楽 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



金炭窯で陶芸を楽しむ市村氏の絵葉書 (中村敦氏 蔵)

一枚の絵葉書 写真のタイトルは、下端に赤い文字で、「市村氏家庭の娯楽 (其八)」とあります。市村氏は、江戸歌舞伎の三座の一つ、市村座の座元の名跡で、現在17世を数える市村家を指すものでしょう。

場所は、東京の市村家の屋敷の中庭でしょうか。飛び石を配した庭には手水鉢や灯笼が据えられ、中門や垣根も見えています。

写真に写っている右手の少し腰を屈めた人物は、不世出の歌舞伎役者ともいわれる15代目の市村羽左衛門 (本名・録太郎) です。フランス生まれのアメリカ人で明治

政府の外交顧問として来日したチャールズ・ルジャンドルと福井藩主松平慶永 (春嶽) の娘絲との間に生まれたとされる出生の事情は、その顔立ちによく現れています。

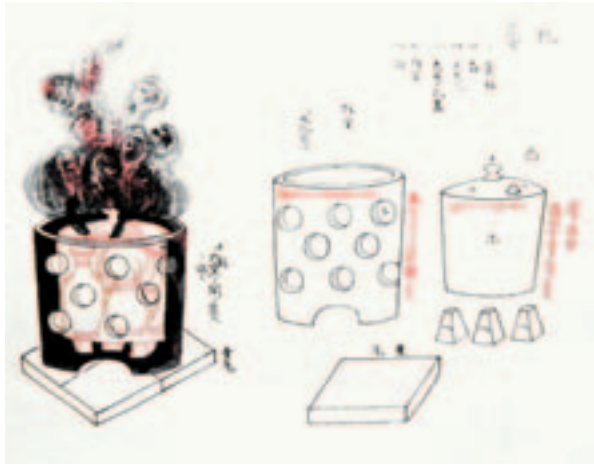
左手に皿を持ち、後の若者が持つ盆の上に置かれた湯呑みに右手を伸ばしています。羽左衛門の手前から横手の地面には皿が4枚散らされています。

写真中央には、金炭窯という、移動できる焼物の窯が据えられています。後方が台に乗せた外窯で、火箸が斜めに立て架けられ、手前には内窯・内窯蓋・色味蓋が並べられています。さらに、窯の左に

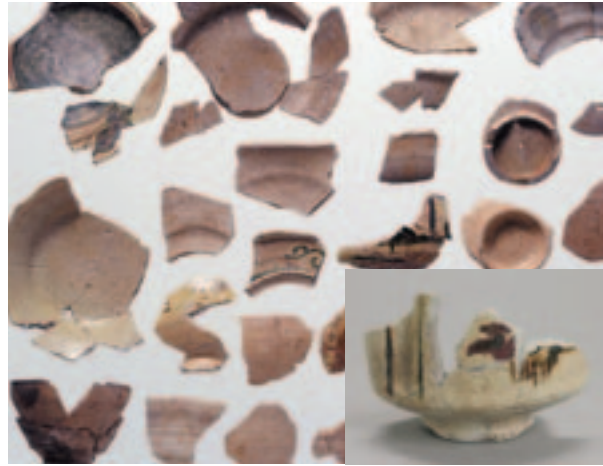
は黒っぽい火消し壺と火箸があり、その後には炭俵が置かれていて焼物に必要な道具が取り揃えられていることがわかります。盆に置かれたり、庭に散らされた皿や湯呑みには絵柄が描き込まれていて、絵付けをして焼かれていることがうかがえます。

金炭窯 金炭窯とよばれる窯は、内窯と外窯の二重の構造で、内窯の中に器を入れ、外窯との間に炭を詰めて焼成する窯で、楽焼窯にも似ており、京焼の窯場では、昭和のはじめ頃まで上絵付用に使用されていました。

絵葉書のタイトルにある「家庭



『陶磁器説』にみる金炭窯



出土した軟質施釉陶器とその素地

の娯楽」とは、自宅で陶芸を楽しむことであつたようです。

絵葉書の左下端には「^{かみがたや}上方屋製」とあり、東京の銀座に本店を置く銀座上方屋が発売した、私製の絵葉書であることがわかります。

日本の官製葉書は明治6年に発行され、官製の記念絵葉書も明治35年には発行されますが、私製絵葉書も明治33年には発行され始め、風俗や流行の新しい伝達手段として、全国的なブームとなつていきます。この絵葉書が販売されたのは、写っている市村羽左衛門の若々しい姿からして、29才で15代目を襲名した明治36年(1903)頃ではないでしょうか。

便りを送る人にも受け取る人にも、この一枚の絵葉書の写真が、

陶芸を楽しむ家庭の情景として理解できるほど、手軽な陶芸窯として金炭窯は一般的であつたようです。

京都府が明治5年に行なつた、京焼の聞き取り調査をまとめた『^{とうしきせつ}陶磁器説』には、金炭窯の部材の形状や大きさ、焼成の様子などが詳しく描かれています。

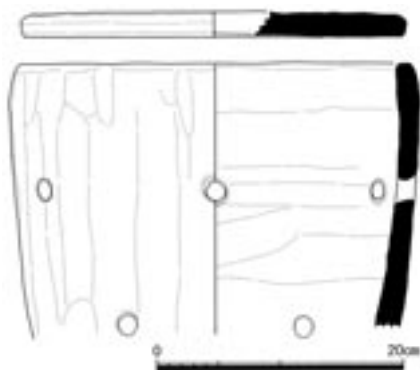
発掘調査から 2002年に行なつた中京区本能寺南町の発掘調査で、金炭窯の内窯と内窯の蓋が出土しています。直径は33cmで、珪砂や初殻を多く含んだ粗い土で作られ、内窯の器壁には径1.8cmほどの^{あな}孔が開けられています。桃山時代から江戸時代前期に相当する時期のものです。

他にも、金炭窯で焼かれたと思

われる軟質施釉陶器やその未成品が1035片あまり出土し、工房の所在地であることが確認されただけでなく、多彩な器を少量生産する軟質施釉陶器の生産体制も知ることができました。

軟質施釉陶器は、中国の華南三彩の技術に加えて美濃のロクロ技術や、当時の美術・工芸などの技法を取り込んだ新しい独創的な焼物で、初期の京焼と関連して最近注目されています。

調査で見つかった工房は、下京の町屋跡に所在します。この絵葉書に見るような移動できる窯を用いて、人々が生活する町なかで軟質施釉陶器が焼かれていたことに、京焼の特徴の一端を見ることができそうです。(原山 充志)



出土した金炭窯の実測図



出土した金炭窯の内窯と蓋